（マルコによる福音書１：２～８）（マタ３：１～１２、るか３：１～９。ヨハ１：１９～２８）

2預言者イザヤの書にこう書いてある。

見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わしあなたの道を準備させよう。3荒れ野で叫ぶものの声がする。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』そのとおり、4洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼（バプテスマ）を宣べ伝えた。5ユダヤの全地方とエルサレムの住民は皆、ヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。6ヨハネはらくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた。7彼はこう宣べ伝えた。『私より優れた方が、後から来られる。私は、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない。8私は水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる。』

前回は、「イエス・キリストの福音の初め」についておもに学んだのですが、では福音とはどのようなものか、福音の性質に簡単に触れておきます。勿論福音は、イエスが　神の支配は近いよ」、即ち、病む者、不具の者を癒し、貧しい者に福音を伝えられたこと、と、弟子達が伝えたケリュグマ（イエスが十字架につけられて人間の罪の贖いをし、復活して聖霊を私たちに与えられたこと）との綜合であって、この二つは全く同性質のことなのですが、しかしイエスさまは、マルコの８：３５には**わたしのため、または福音のために、自分の命を失うものは、それを救うであろう**」。１０：２９には、**誰でも、わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、もしくは畑を棄てた者は・・・百倍のものを受け**」と云われています。つまり福音と言うものは、私たちがその福音の為には、色々なものを所有する事も、親しい者が私と共に存在することすら、第一義的なことではないと否定して、福音を聞くことに較べれば、そんなものは取るに足らんものだと言われている。何一つ失うまいと言う態度では人は福音から何も得る事は出来ないと云われるのです。注意すべきは、文章中の、福音という文字の前に　わたしの為に」と言う言葉が入っている。つまり福音（よい便り）というものは、イエス・キリストの事実：イエス・キリストそのものだ　前述の二つを綜合したもの）と言うことでしょう。信仰に入った初めは、福音の為に愛する人たちすら棄てねばならぬ事があると云うことに私は我慢できなかった。他人をも愛しようと考えてキリストを信じたのですからね。まして自分の親しい者たちを棄てるなんてとてもとても出来そうにない。

しかしこの福音は[イエス・キリストの生涯の出来事全体を意味する]と気づいた時、私たちのエゴイズムが崩れ始めます。自分の利益、面子、地位、勝つこと、ほめられる事ばかりまず一番に考える事が疑問になってきます。そして、福音は容赦なく自分のこの世的な利益を棄てる事を、献身を、要求する事が分かって来ます。しかし私たちが涙を飲んで、しぶしぶ福音に従うと、本当の喜び　喜びと自由」と言うものがどのようなものかが分かってくる。福音に聞くと、**《イエス・キリストに聞くと、と云い直しますが》**、そして聞く事は従う事を含んでいるのですが、この　喜びの知らせ」を

どうしても人に話したくなってくる。８５歳にもなって皆さんと一緒に聖書を読もうと言う気にならせるのは福音だからです。福音は理屈ではない。人に伝えようとする気持ちが湧いてくる、そういう性質のもの、喜びなのです。それはイエスから来るものだから、イエス・キリストの福音です。つまり、イエス・キリストと言う人格から伝わってくるものです。愛そのものであるイエス・キリストの現実に出会うことだと思います。包み込むもの、支えるもの、照らし出し、光り輝くもの、暖めるものです。

さて、ヨハネのバプテスマ運動は、（旧約の）予言の成就であり、神様の約束が成し遂げられようとしているのだと知って、民衆がどんどんその洗礼を受けにやって来ます。ユダヤの全地方とエルサレムの住民とありますから大変な数ですが、「皆」と言うのは神に働きかけられた者は皆なのです。その数が多いことによってヨハネは益々神から出た者である事が分かります。マルコの書いているイザヤ書の予言と言う言葉の前半はイザヤ書ではなく、マラキ書３：１の『**見よ、わたしはわが使者を遣わす。彼は私の前に道を備える**』であり、《**主なるさばき主が来ようとしている。その先触れが既に派遣された。終末の日が近づいている**》と言っているのです。ヨハネが現れて宣教を開始したのは、西暦２８年ですが、ヨハネの叫びは民衆の待望に答えて「神のご支配が始まる。待望していた尊い方が来られた」と言って、終わりの日に神の民を呼び集めるために、バプテスマを施したのです。言葉の後半はイザヤ書４０：３の『**呼ばわるものの声がする。［荒れ野に主の道を備え、砂漠にわれらの神のために、大路をまっすぐにせよ］**』です。第２イザヤは、主の民らがバビロンでの捕囚から解放され、まっすぐに荒れ野をよぎって帰ってくる道を備えよ、と言ったのですが、マルコはその言葉を用いて、その道を主なるメシアの道、主キリストがその民を慰める為に急ぎ来られる道、と解釈しました。終りの時に救い主が出現する予言です。つまりよく見るとマルコは、「イエスより先に現れて、悔い改めのバプテスマを宣べ伝えてヨハネが働くこと」が、イエス・キリストの道を開くことだと、はっきり記している。それはヨハネの先駆けによって現れるイエスの出現を、旧約時代の全歴史を貫く救済史と結びつける為です。だからイエス様は弟子達に、『**エリヤは既に来たのだ。・・・ヨハネは旧約の中でもっとも大きい預言者だが・・・**』と仰った。（マタイ１１：１０～１５）（エリヤは、キリストが現れる前に、現れて色々の準備をするという、マラキ書の予言があった：後述）。

何故ヨハネは荒れ野に現れたのでしょう。民衆がもっと集まっている都市に現れなかったのでしょう。その方が宣教の効率から云って望ましいでしょうに。考えて見ますと、人間は罪に捕らわれています。神様の事を考えずに、自分達の便利さや、華やかさや、お金を儲けることや、地位が高くなることばかり考えている。誘惑にももろいのです。都市や文明と称するものはいかに誘惑に満ちているか。私共人間が神の声に、福音に耳を傾ける為には、荒れ野の中でのように、一切を剥ぎ取られ、裸になった私たちが、素直に、率直に神に聞かねばならぬのです。裸になるとは、自分という人間の真実に向き合うことです。貧しい、卑しい人間だなあと自分を発見し、自分には力がないと悟ることです。そこで始めて魂が揺すぶられ、悔い改めが始まります。或る男性は、鏡に向かって髭を剃っている時に突然鏡の自分に向かって「お前は汚い。卑劣漢め」と自分の真実に目覚め、自分に対して罪の告白をしました。或る人は、有

名な牧師の説教を聴いたあとに、不正に頬被りして返済せずにいて、時効になった昔の借金をわざわざ支払い、他人に対し自分の過ちを公表しました。《荒れ野に水は湧く》（イザヤ３５：６）のです。荒れ野＝大方は砂漠、では水や泉は非常に貴重です。その水で人間は、洗ったり、清めたり、飲んだりします。「清める」とはどういう事でしょうか。有名な山上の説教に「**心の清い人は幸いである。その人は神を見る**」（マタイ５：８）という言葉があります。清いという事は神様の方を向き、ただ一筋に神様を見ることです。それが神に対して、自分の罪を告白し、悔い改めることです。一般に考えられているように聖人になることが清くなることではない。バプテスマのヨハネの使命は、**《罪の赦しを得させる悔い改めのバプテスマを宣べ伝える》**事でした。だけどヨハネの水のバプテスマは、イエス・キリストの聖霊のバプテスマの準備的なものでした。それはヨハネの使命ではありましたが、彼の力だけで遂行できるようなものではありませんでした。神の力が必要なのです。神の力が現れる為には、荒れ野に集って来ようとする民達の自発的な意志がいるのです。現在でも、洗礼によって救われるのは、勿論神様の力、イエス・キリストの十字架、復活による、贖いの力が働くのですが、《イエス・キリストを主と告白する》私たちの信仰が、神様によしとされ、神の力を招くのです。「主と告白する」、とはどういう状態ですか？昔は奴隷という身分がありました。王様は奴隷に対して絶対の権威、権力を持っていました。ローマ皇帝のような、生殺与奪の権力です。パウロは「自分はイエス・キリストの奴隷だ」と表現しました。自分の命を棄ててキリストの宣教をするというのです。「勿論キリストからは、奴隷のように取り扱われるわけではなく、宗教改革で有名なマルチン・ルーテルの言ったように、大きな自由を与えられるのですが――「キリスト者の自由」）。

「自分達は神の側に立っている。神の外にいる未信徒の方々とは条件が既に違うのだ」と思っている、当時のユダヤ信徒達の傲慢こそ「悔い改め」が最も必要だとヨハネは叫びました。当時最も信仰深いとされていたサドカイ派やファリサイ派の人々に向かってヨハネは《蝮の子らよ・・・『我々の父はアブラハムだと』思ってもみるな》（マタイ３：７～８）と悔い改めを迫ったのです。しかしそれは現在の私たちキリスト信徒の立場のことかもしれません。洗礼を受けているか、いないかの問題ではなくて、キリストの平和を理解し、キリストの愛を信じ、実行できているか、どうかの問題だからです。実行出来ていないという点において、信徒も未信徒もまったく同一の点に立っているのです。大多数の信徒は、実行できない自分に気がつき、悔い改めているだけです。では悔い改めって何でしょう。後悔でしょうか？後悔とは全く違うものです。尤も、後悔に似た感情が入ることもありますが、基本的には、「神様がご自分に似た者として人間を創られた」と言うことと大きな関係があると私は思っています。

「神の形に似せて創られた」といっても、神と人間の形状が似ている、と言うわけではないことはすぐ分かりますね。神様のご性質を頂いている、と言うことですが、所が困ったことに、神様のご性質なんて人間に分かる筈がありません。だから神様はモーセを通して十戒を賜り、律法によって、『「こうしなさい」、『こんな事をしてはいけない』と事細かに教えられた。所が人間は枝葉末節にこだわって、肝心の神様の根本的なご性質；愛と平和、憐れみと寄り添い、つまり**赦し**」を忘れてしまうどころか、神そのものを見失い、神に背くと言う失敗を続けるのです。イエス様が現れて下さって、

神様のご性質をはっきりと示してくださったのに、それを認めないで、十字架につけて殺してしまった。しかし、十字架、復活を信じる者には、聖霊＝神の霊を与えて、神のご性質はこのようなものだと示された。**私は水で洗礼を授けたが、その方（イエス）は聖霊で洗礼をお授けになる**」とヨハネが言ったのは、そのことです。現在でも、信じる者は、キリストによって聖霊を注がれ、全存在が聖霊に浸され、そこから新しい命に生きる者として生まれ出るのです。マルコはそう云っているのです。大切な洗礼の事は次回に話します。

ヨハネは随分変わった格好をしていたようですが、これは何を意味しているのでしょうか。預言者エリヤと同じ格好です。マラキ書４：５に　見よ。わたしは、主の大いなる恐ろしい日の来る前に、預言者 エリヤをあなたがたに遣わす」、という予言があるのですが、ヨハネはそのテシュベ人エリヤと同じ服装をして、（テシュベ人エリヤのことは列王記Ⅱの１章に書いてあります。殊に８節に。）そのいでたちしか出来ない人間である事を示しました。すなわち、自分は　主の大いなる日がまさに始まろうとしている事を告げる為に遣わされた人間だ」とヨハネは云っているのです。「福音の初め」に立たされているのを自覚しているのです。人々に、予言されていた終末的な時代に入った事を感じ取らさねばならなかったのです。彼は云っています。　私より力のある方が、あとからお出でになる」と。ヨハネはまず、キリストの証し人として現れたのです。キリストはその時ヨハネの傍に既に、この世界に来ておられました。ヨハネの時以来キリストは　生きておられる」のです。だから　「福音」も生きているのです。故に福音はヨハネの時から始まった、とも言えます。でもヨハネは唯ひたすら、あとに来るものを指し示しました。自分がイエス・キリストに較べて如何に力の劣るものかを謙遜に伝えたのです。**「わたしはかがんでその方の履物の紐を解く値打ちもない。わたしは水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる」**。ヨハネの謙遜は生活態度でも現されました。いなごと野蜜を食べていた、と書いてありますが、いなごというのは或いは　「イナゴ マメ」という一番下等な豆類であったかも知れません。野蜜は、野生の蜂蜜のほかに、ある種の樹液です。ヨハネはそのような粗末なもので生活し、あらゆることで低くされた自分を顕し、唯ひたすら、主イエスを指し示したのです。終わりの大いなる日が始まったのだよ、と。

今日のレジュメ

①、バプテスマのヨハネは、旧約的、預言者の最後の巨人であって、イエス・キリストの先き駆けとして同時代を生きたということ。

②、福音は、倒れた者を起こし、辱められた者を栄えさせる為に、荒れ野から始まった。人間も心の荒れ野から出発する事が望まれる。

③、ヨハネの使命は　罪の赦しと悔い改め」のバプテスマを宣べ伝えることであった。悔い改めとは、心を入れ換えること。神に帰ることです。信仰によって自分が洗礼を受けている事を、神様の呼び声を感謝しましょう。

④　ヨハネとイエスの最大の違いは、　神の子」と　「人間」と言うことですが、だからヨハネの授けるバプテスマは水のバプテスマであり、イエスの　お授けになる　洗礼）バプテスマは、　聖霊のバプテスマ」なのです。